第１章　序章

１．はじめに

都市環境の快適性やアメニティに対する住民の意識は最近益々高まる方向にあり、住民参加型の街づくり運動も多くの事例が見られるようになった。また、景観などの都市計画上の問題を検討する場合に、事前に住民の居住意識の調査を行うことが少なくない。

ところで、日本人の居住意識上の集合住宅の位置付けは、庭付き一戸建てを買うまでの仮の宿という従来の姿から、一生住まう「終の住みか」に変化しつつある。加えて、都市部における過密がもたらした高層化の流れは益々進み、超高層住宅といえども、もはや特殊な住宅形態ではなく、都市居住における選択肢の一つとなっている。即ち、超高層住宅に定住と言うライフスタイルが登場することになったのである。

この、立体的ともいえる新しいライフスタイルは地表面との距離の問題を抜きにしては語れない。居住する階が高くなることにより、窓から入ってくる音の性状や窓からの眺めの様相が大きく変化し、超高層居住階の住民が得る街の情報は多様化かつ希薄化してしまう。即ち、ディテールが削ぎ落とされたマッシブなものとなるのである。この情報の変容が、移動時間という距離以上に心理的に住戸と大地とを遠ざけることになるのではないか。このことが新たな形のストレスを生み出しているといえよう。

もちろんストレスという観点から超高層住宅居住を対象とした調査事例の報告はあるが、視点としては高層住宅の延長という感が強く、外部からの情報の変化に注目している研究は少ないのが現状である。

この様な状況に鑑み、本研究では、超高層住宅に住むことによる外部状況のフェイズの変化が、居住意識や周囲の街に対する意識に及ぼす影響を検証することを目的とする。

研究では、外部状況の主たる媒体である視環境と音環境に着目し、日本各地にある立地状況の異なる超高層建築物を対象とした。

視環境については、これらの建築物から撮影された映像を元に印象評価実験を行い、視点位置が高くなることによる外部の印象の変化の傾向とその立地状況の関係を考察した。（第２章・３章）

また、音環境に関しては対象とした超高層建築物の中の２棟において音の実測および音事象の調査を行い、サウンドスケープという観点から超高層における環境を把握した。（第４章）